2024年4月14日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

愚か者への福音

［コリントの信徒への手紙一3章1～9、18～23節］

「兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語ることができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、今でもできません。相変わらず肉の人だからです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか。アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになります。わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだれかが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。「神は、知恵のある者たちを／その悪賢さによって捕らえられる」と書いてあり、また、／「主は知っておられる、／知恵のある者たちの論議がむなしいことを」とも書いてあります。ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。 」

[1]　あなたがたは、神の畑

 新年度の聖句を、皆さん、もう覚えて頂けましたか？今日の礼拝の招きの聖句でもあった「テサロニケの信徒への手紙一5:16～18」です。恐らく私は何度も今年度の礼拝の中でこの聖句を引用すると思います。皆さんも日常生活の中でも、この聖句を思い起こして頂きたいと思います。使徒パウロはキリスト者の生活で、３つのことを強調したのですね。「喜ぶこと」、「祈ること」、「感謝すること」です。

　私は、こんなことを言うと、皆さん驚かれるかもしれませんけれども、今年は、私は、今後の自分のことを、良～く祈り、考え、決断してゆく一年だと思っています。と言っても、今の川越教会での働きについてもう終止符を打ちたいとか、そういうことは思っていません。そうではないのですけれどもこれ迄5年間仕えてきて、今本当に「教会」、そして私はこのままで良いのだろうかと、緊張感と共に神様に問われてきていることを感じているのです。で、そういう時に神様は、「教会」の本質について記している、このパウロの手紙、「コリントの信徒への手紙」を読ませて頂けるということに、とても大きな導きとチャレンジとを感じています。本当に私にとって、神様と取っ組み合ってやって行きたいと思っていますので、是非お祈り頂きたいと思っています。そして、それは私にとってもそうかもしれませんが、それだけでなく、この川越教会にとってもこの一,二年は、今後の5年や10年後の歩みにとって大きなチャレンジの時だと思うのです。今日の第一コリント書の中で、「あなた方は神の畑である」(3:9)という言葉がありました。どんな意味でパウロはそう言っているのでしょうか？「畑」が“痩せない”ためには私たちは何が出来るのか、そして、することが求められているのかということです。良い意味の緊張感です。「教会」という「畑」が存在しているということ、継続していくということは決して当たり前のことではありません。私はその意味でも今年度の聖句（テサロニケ一5:16～18）が心に深く響いてくるのです。

[2] 人間を誇ってはならない

 先週も見たことですが、このコリントの教会では、どうも「私は一体誰に付くか」という言い争いがあり、内部崩壊しかねない状況がありました。私たちは思いますよね。教会という所は、皆がお一人の神様を、イエス様を信じている所でしょう、「私は誰に付く」なんて本当に愚かなことだと。正にそうなんですね。どんなに優れたリーダーが教会に居たとしても、その人は神様じゃありません。パウロは先週の箇所では、「私はパウロに」「私はアポロに」「私はペトロに」と言い合っているコリント教会の者たちに、「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか？（1:13」」、それはおかしいでしょう、と言っています。これは今日の3章の所でも、教会の分派争いのことに触れ、「ですから、誰も人間を誇ってはいけません」（3:21）と言っています。「誰も人間を誇るな」と。

　誰かを尊敬すること、その人から学ぶことは勿論悪いことではありませんね。しかしそれで教会が分派争いになるとはどういうことなのでしょう？お互いを受け入れられなくなってくることが起こってくると思います。そしてその「誰か」に付くことによって安心を得る、何か自分自身を誇ることにも繋がっていくように思います。これは人間の交わりがある所、いつでも起こり得ることではあります。しかしパウロは、教会という所は、人間的誇りが前面に出て来ると、それは教会ではなくなってしまうと言っていると思います。パウロは3:3で厳しく、「お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか」と言っていますね。

　私たちは今日も教会に来ています。この肉の体、ある意味弱い自分をまといながら来ています。私たち、よく勘違いされることがあると思います。「毎週教会に行っていっているなんて、本当に敬虔深いのね」と。しかし、キリスト教の信仰というのは、敬虔深くなったから信仰を持ったということではありませんよね。そうであったら、イエス様は居なくて良いのです。自分の努力、信心の強さで立っていけるとすれば、それがそれこそ「己を誇りとする」ことになります。神様に寄り頼まない。それをパウロは「肉の人」と言っていると思います。でも私たちが毎週のように来るというのは、神様に立ち戻るためです。そうではないでしょうか。神様なしでやって行けると思う人は礼拝に来ません。聖書に聞くことをしません。でも渇く心、神様に飢え渇く気持ちが出てきたら、幸いなことだと思います。それこそ、心の「畑」に天からの雨水が降りて来て、主の御声を素直に聴くことが出来るように、主の霊の働きによって心が潤って来るのです。自分では決して自分を満たすことが出来ないのだということを知る故に、私たちは教会に来たり、聖書を開いてて祈ったりするのではないでしょうか？私たちの信仰というものは、本質的には神様が育てて下さるのですね。3:5以下をお読みしますとこうあります。―「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」

　この時のコリント教会には牧師が居たのでしょうか？複数のリーダー的存在はいたと思いますが、信徒の群れであったかもしれません。「牧師」がいるということは安心感を与えるかもしれませんけれども、そのことで時に強権的になったり、或いは依存したりして、ひどく人間的要素が強くなってしまうことだってあり得ると思うのです。一筋縄ではいかない。でも主イエス様はおっしゃいましたよね。「二人または三人がわたしの名によって集まる所には、わたしもその中にいる」（マタイ18:20）と。この言葉はある意味、人間的な力とか誇りが、キリストによって取っ払われた所にこそ“教会”はあるのだと言っているのではないでしょうか。

[3]　 神様の前に誰よりも愚かになられた方によって

　3:18をお読みします。「だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだれかが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです」。

　コリントの地はギリシャ哲学の影響もあり、自らの知恵を誇る人も多かったのですね。知的な人々です。でもそれを誇る者を、パウロは「肉の人」と言いました。では逆に「霊の人」とは？それは、本当の意味で「愚か」になれる人、神様の前に愚直な人のことだと思います。ではどうしたら愚か者になれるのでしょうか？あの主イエス・キリストを見つめることによってだと思います。主イエス様こそ、神様の前に誰よりも愚かになられたお方ではないですか。 このお方はペトロの手紙一2章ではこう言われています。―「この方は、ののしられてもののしり返せず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして十字架にかかって、自らその身に私たちの罪を担って下さいました。…そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」。―黙々と屠り場に引かれて行く小羊のごとく、何ということか、神の独り子が、あの十字架を私たちのために背負って下さいました。この「愚かさ」です。それがなければ私たちに救いはなかったのです。そしてそれこそが愚かな私たちの救いでありました。そこで私たちは、己を誇ったり、自分の知恵に寄り頼むということがいかに不信仰な事であるかを知りました。

　教会とは、このイエス様に見出された者たちの集まりです。私たちの功は何も無いのです。だから、教会は尊いです。教会は、主イエスがかしらとなり、臨在して下さる“世にはなき交わり”ですよね。今日も二人また三人以上の者たちが集まって共に礼拝を捧げている。この「神様の畑」が瘦せた土地にならないよう、更に良き土地となるよう、私たち、ここで賛美を捧げ続けましょう、ここで祈りを捧げましょう。御言葉を分かち合いましょう。先ほどご一緒に讃美した「輝く日を仰ぐとき」の3番は、こう歌っていましたね。「あめつち造りし神は、人をも造りかえて、正しく清き魂　持つ身とならしめたもう　わが霊（たま）いざたたえよ、大いなるみ神を」。そうです、私たちの内なる人は日毎に変えられてゆくのですね。私たちはこの体を持ちつつ、しかし、霊の人として、昨日よりも今日、今日よりも明日、完成の日に向かって、主に信頼して従って行きたいと思います。自分とお互いのために祈りながらです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリストイエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」（テサロニケ一5:16～18）。　お祈りを捧げます。

　主なる神様、「教会」とは何と不思議な交わりであることでしょう。そして、あなたが作って下さったこの交わりに招かれていることを深く感謝致します。どうぞ、この只中に生きて働かれている主を、いつも共に仰がせて下さい。この川越教会がこれからもこの地で、誰も主なる神様から見捨てられることはないという福音を掲げ、主の導きを信じ、これからもあなたにお委ねしていく信仰を持ち続けさせてください。主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。